

大正15年本郷座初春興行のこと ・ 本郷座の演劇のこと(前編)

1961年 経済卒 大村堯彦

手元に A5判32ページの小冊子がある。右開きで紙は薄茶色に少し変色している。

表紙は緑と赤の下地に同じ緑と赤の濃淡と白抜きで松梅竹のお目出度い地の絵が描かれ、黒摺りで馬を駆る侍の芝居絵が2枚、右上と左下に貼ってある図柄。おもては勘亭流で「大正十五年」と小ぶりに縦書き、左に並べて大書きで、「本郷座初春興行」とある。この小冊子のうら表紙は、おもて表紙に続く松梅竹の地の絵で、右下に、おもて表紙に貼られた芝居絵の馬上の侍と向き合うかたちで遊女の絵の図柄がある。このうら表紙右上に「ミツワ石鱈」と太く黒字で縦書きされ、真中下に白抜きでミツワ石鱈と書かれた真っ黒な箱が描かれている。大正15年本郷座の正月興行の筋書きである。

表紙ページを開けると表紙裏は紙地の上に赤字で右横書き「大正十五年」、2段目に大書きで「本郷座初春興行」とあり、その下に縦書き右から左へ演目が並んでいる。

序開	楼門五三桐	一幕	大薩摩連中
壱番目	伊賀越道中双六	二幕	岡崎より仇討まで
中幕	鷺娘		長唄囃子連中
	保名	一幕	清元梅吉社中
二番目	三世河竹新七作		
	籠釣瓶花街酔醒	四幕	見初より捕物まで

この小冊子の本文1ページは「観劇おぼえ」と表題された縦15行、横4段に線引きされた観客用メモ用紙になっている。

2ページ目は 當る大正十五年一月二日初日 毎日午後三時開演 とあり 観劇料と劇場席の見取り図である。

3ページ目が「役割」となって出演の役者名と各演目の配役名がある。

出演の主な役者を見てみよう。

吉右衛門、三津五郎、時蔵、八十助、福助、三舛、中車の名がある。吉右衛門、三津五郎、時蔵、八十助の吉右衛門一座に福助、三舛、中車が参加した興行である。

初代中村吉右衛門 40 才、九代目団十郎亡きあと新しい歌舞伎作りで六代目尾上菊五郎と人気を競っていた。七代目坂東三津五郎 43 才、坂東流の踊を流派として纏め上げた踊の名手。三代目中村時蔵 31 才、吉右衛門の弟、一座の立女形。坂東八十助(八代目三津五郎) 19 才。五代目中村福助 26 才、六代目中村歌右衛門の兄、現芝翫の実父に当る人で、34 才で病死、美貌で人気役者であった。市川三升 44 才、十代目団十郎名を追贈された人。七代目市川中車 66 才、小芝居から演技力でみとめられ九代目市川団十郎の門人となり、幹部俳優に成った人で、時代物の立役を得意とした。ちなみにこの時代、活躍している他の役者の年齢をみると、六代目尾上菊五郎 42 才、二代目市川左団次 45 才、六代目市川寿美蔵(三代目寿海) 40 才、二代目市川猿之助(猿翁) 38 才、五代目中村歌右衛門 61 才である。現在の名題役者に較べ随分と若い。

4 ページ以降に記載されている演目別の配役は次のとおり。

序開 「楼門五三桐」 一幕 南禅寺山門の場

石川五右衛門: 中車 真柴久吉: 吉右衛門

壹番目 「伊賀越道中双六」二幕 序幕 岡崎幸兵衛内の場 大詰 伊賀上野本望の場

唐木政右衛門: 吉右衛門 山田幸兵衛: 中車 政右衛門妻お谷: 時蔵

柘榴武助: 三津五郎 梶川源右衛門: 三升

中幕 「鷺 娘」 河岸芦原の場

鷺娘: 三津五郎 烏娘烏羽玉: 八十助

「保 名」 花の宮物狂の場

保名: 三津五郎

二番目 「籠釣瓶花街酔醒」 序幕 吉原仲の町見初の場、三番目 仲の町立花屋店の場、同大音寺前浪宅の場、三幕目 兵庫屋二階の場、大喜利 立花屋二階の場

同 大屋根上捕物の場

佐野次郎左衛門: 吉右衛門 荷持次六: 三津五郎 兵庫屋の八ッ橋: 福助

繁山栄之丞：時蔵 三浦屋の玉の井：八十助

各演目の右ページは芝居の粗筋が、左ページは白黒でその芝居絵が載せてある。

最初の芝居「山門」の豪華絢爛の舞台は正月にふさわしい。絵本太功記十段目光秀役の中車の睨みの凄さを写真で見ているので、この中車の五右衛門と若い吉右衛門の久吉の睨み合う舞台はどんなだったろうか。最晩年の播磨屋しか知らない私には想像ができない。

次の「伊賀越」岡崎はよく上演されるが、「伊賀上野本望の場」敵討ちの場は今日では

あまり上演されていないのではないか。三升の梶川源右衛門は敵討ちの検分役である。

中幕とされる踊は長唄の「鷺娘」と清元の「保名」である。踊り手は踊の神様と掛け声が掛かる三津五郎である。この踊だけでも世の子女は本郷座に押掛けたにちがいない。

「籠釣瓶」。吉右衛門の名演技と謳われた次郎左衛門である。相手の遊女八つ橋に花の女形福助の登場となる。

筋書きの後半ページに俳優楽屋話がある。

吉右衛門は若い端正な顔写真と共に次のような言葉が載せている。「此の佐野を初めてやりましたのは大正11年5月の新富座でございました。初役ながら種々(いろいろ)有難い御評判に預かりましたに甘へまして、今度もこれと云ふことになりました。此の佐野の狂言は種々ございますが、此の籠釣瓶が実説に近いものなそうでございます、三代目河竹新七が講釈から脚色したもので、黙阿弥、其水(きずみ)が補助として筆をとつたものだ承(うけたま)はつて居ります。出来ましたのが明治廿一年五月でございまして、先代左団次(たかしまや)に書卸(かきおろ)されたものでございます。唯今の歌右衛門が八つ橋を勤めましていづれも好評だつたさうで、以来左団次(たかしまや)の家の芸となつて居りますもので、私の初役の時も左団次(たかしまや)方へ届をして私が自分の柄につきます様に工夫をしたことでございます。」吉右衛門の自信と意気込みがみえる。

八つ橋役の福助の話は六世歌右衛門とそっくりの写真と共に載っている。「当初春は、本郷座の大一座に加わりまして、二番目籠釣瓶花街酔醒で遊女八つ橋を勤めて居ります。此役は不思議な縁で、書卸しに先代左団次(たかしまや)の次郎左衛門に父歌右衛門が福助時代で此役を勤めて居ります。大正十一年五月に新富座で吉右衛門が初めて次郎左衛門を出しました時に、私が矢張初役で此八つ橋を勤めまして、今度も吉右衛門の次郎左衛門に私が此役をと云ふ訳でございます。」若い女形のこの役一筋の思いがある。

三津五郎、時蔵、三升、中車、その他主俳優の楽屋話もあるが、いづれも芝居の筋や見所と云つた話で、皆が皆話の終りにはスポンサーのミツワ石鯀の効能や使用のお勤めの言葉で締め括っているのも面白い。

2ページの御観劇料であるが、御一名 一等:五円、二等:三円、三等:二円、四等:一円、座席:六円 とある。

座席とは棧敷席のことであろう。座席見取り図によれば、中央に椅子席 757、棧敷席は舞台向かって左右に各 42 ある。大劇場である。さてこの料金高いか安い気になるところだが、大正の物価(価格表一覧)で見ると、米 1 升:50 銭(二等米)、酒 1 升:1 円 70 銭(1級酒)、もりそば1枚:10 銭、天井1杯:30 銭、うな重 1 人前:40 銭(並)、3 食付き下宿:15 円、相撲入場料:2 円 80 銭、大卒初任給:50 円、大学の授業料(年額):100 円となっている。今の演劇や音楽会のチケット代と較べそんなに高くないのかもしれない。

さて此の正月興行の評判は如何だったのだろうか。残念ながら私は調べていない。悪い筈はないと思うのだが、この年の四月に同じ本郷座で「尾上菊五郎、中村吉右衛門顔合せ」興行で忠臣蔵と勸進帳を行なっている。中村吉右衛門、坂東三津五郎、中村時蔵、坂東彦三郎(六代目)、大谷友右衛門(六代目)、市川男女蔵(四代目・三代目左団次)、尾上菊五郎の一座。「仮名手本忠臣蔵」三段目より六段目まで四幕。高師直・定九郎:友右衛門、塩谷判官・勘平:菊五郎、大星由良之助・千崎:吉右衛門、若狭之助:男女蔵、石堂・源六:三津五郎、おかる:時蔵、不破:彦三郎。「勸進帳」富樫:吉右衛門、義経:三津五郎、弁慶:菊五郎である。今考えてもぞくぞくする配役だ。

吉右衛門一座の本郷座公演は大正 14 年 5 月、10 月の 2 回、同 15 年 1 月、2 月、4 月、10 月の 4 回、昭和 2 年 1 月、3 月、4 月、7 月、10 月の 5 回、同 3 年 1 月、3 月の 2 回で終わっている。大正 14 年から昭和 3 年まで本郷座は吉右衛門一座の本拠地であったと言えるだろうか。

以上紹介した「大正十五年、本郷座正月公演」の筋書きは私の父の遺品を整理していて見付けた物である。何か大事な思い出があったのであろうか。この年父は 31 才、上野の美術学校彫塑科を卒業し、帝展に 2 回入選しばかりの若手彫刻家であった。本郷菊坂の下宿に住んでいて、吉右衛門が好きで本郷座によく通ったのだろう。

(続く)